

繪本回村物語
三

遠
229
2



門遠
979
七. 3

復讐 田村物語 卷之三
奇説

武關

川上 鯉 老 編輯

下流 梅梢軒 關旭 訂正

第五回 名家の災

復讐と秋と行かぬ空の通ひ跡と。かゝる涼し風や吹らん。と護る
頃もさや之伏の未なりし。或夕暮後かた暑と避んとて西市
と世代ととも。四糸河原の納涼。今此所の納涼は六月七日。風の
清らけ暮ひ家々此家号記せ。燈の光も賑し。いふまじれ

とこれ女の流石都の風俗。雲の鬢け。花の顔粧。これもあは
ば。あつり顔。今秋の小哥唄。男もあり。年々幸は。兒童乃。
いづれあはれ。願のさあつても。あつて已が。あつて

明治
治明

明治
治明

田村物語 卷之三

也。いとおうあふいとめて。覺て。正市ハ暫く旅の憂次亡也。こつ
 彼所と見物せし中。歳の頃十六七も見ゆ。御曹司の只一人
 面々美玉の如く。目秀眉清らうなれ。頭ハ端反の笠。衣は
 袴高く撮あげ。遠乗ふ忍びく。物さそふ有候。月毛。駒の
 飾りせ。靴を履り。立四方。手ハ鞭を結び。白泡とぬ。曹司
 自づつて馬ハ水かかんとせし。時息を限り。後さかけ。内親
 信の臣と云て。中く。小追付。彼ハ。お替つ。響と取。一度
 と笑ひ。一度ハ。あつと息は。さて。ま。折。忽大勢。立。隆。く。
 東西。走り。南北。小。迷。つ。正市。世代。他。も。こ。い。な。れ。
 珍事。物。出。ぬ。ら。んと。傍。お。ま。て。入。て。あ。は。は。お。ひ。も。お。ま。

其大と六尺。野猪の肩のうらうら。血ハ。洗。は。し。吼。狂。て。ま。い。一。文。字。ハ
 彼。御。曹。司。と。目。掛。お。ま。る。に。避。ん。と。それ。も。人。の。林。を。為。す。れ。ハ。跡。ハ
 一。歩。と。進。め。五。歩。を。堅。め。つ。ら。つ。て。お。ま。る。野。猪。の。あり。や。牙。と。突。ま。ん
 と。せ。し。処。を。牙。と。擦。と。こ。ん。し。力。ハ。任。て。微。塵。お。な。れ。と。蹴。り。け。れ。お。ま。
 何。あ。る。と。云。ま。御。曹。司。ハ。野。猪。諸。も。た。右。ふ。と。こ。と。倒。よ。り。野。猪。を
 益。怒。り。を。な。し。又。お。ま。上。つ。御。曹。司。の。起。ま。ん。と。せ。し。引。手。の。方。お。ま。を
 を。か。し。潜。て。右。お。ま。又。う。ら。向。へ。た。左。ハ。避。ま。右。ハ。小。蝶。の。閃。く。と。こ。お。
 變。萬。化。の。働。さ。に。怒。り。つ。野。猪。も。前。後。左。右。お。ま。度。と。失。ひ。勢。
 ぬ。け。て。お。ま。を。透。を。伺。ひ。四。足。を。獲。ぶ。け。つ。ま。わ。り。月。
 よ。り。も。高。く。さ。し。上。り。大。喝。一。声。大。地。へ。ど。ろ。ど。ろ。投。つ。く。と。は。地。響。音。ハ



田村營
四條川系
おし不意
勇とめ
ハシ



田村營



関正市

世代作

山の崩ろく如く。さしめの大野猪のけさま成りて牙と震い。四足を動し吼声鯨鐘のごとく。暫時お息を収めたる。目もくも亦おそろしかりけれ働なり。是をみるより數百の物同音も賞嘆の聲もさしめ鳴も止まりけれ。此野猪はこれ。事少て。此所め狂ひまると。其所以と尋ねおふ。とある。熊師の生れ熊膽猪膽と鬻て。過つて成せぬ人の山より打留る野猪の未死もやぬを。其まに四足縛りて。宇多は邑お持する。とて。道めて搦し繩の切とられが。知はれぬ。さばて匪子みや。取逃せるみや。そ有りけれ。斯く彼公を。小袴の塵打拂ひ。笠の紐リメは。完雨と笑つて。駒お打撃。一鞭く道とく。乗出さる。御風情美男といひ。勇力と云。威風且州も打靡て。足撥は早と

行駒の跡も追み漏れおぞ。猶後とくに騎馬の供人奉行立の供人も跡を慕つて走り行ぬ。正市に此有。は始終らして。深くも感じつ。何とらこの公なるか。る主君お仕へて。日比の本妻も達とめれと。頻にお動きて。是彼と尋問。諸人の内にお知る人ありて。御方の是を知り。や。忝くも從三位右衛門督坂上の蒨田磨の。子。田村磨とて。仁心至孝智勇兼伎の良将ありて在なり。今朝とさく。二三十騎が。打群て嵯峨の奥はして。生身お有。さよおえ。請しが。今そ其歸りの急さ。まおたるべし。な。細く物語。正市親を。撰て。満面喜悅の笑を顯し。我鄙お住居といふも。仄お此公の高。を。笑。正。果。ち。其。実。ふ。た。が。ん。と。獨り。雀。踊。く。故。ひ。是。より。い。ろ。く。こ。便。

又恐めて終ふ。新田磨の家小娘と仕宦母就つれが。日夜公を信
 信守に勤まれば。又も追ひ昇進して。然も田村磨の中謝の列小
 加りて。いよつづの間に忠勤怠れれば。田村磨の恩墨も少く
 らざ。召仕りれられ。あそ。正市ハ。続小一の素懐を遠て。かの行殿
 居士より受る所の千手観音の隠篆二枚を取出し。田村磨に捧
 て其所以を審よ語り。月雪姫も病臥すめと。又ハ。行殿との
 隠篆を謁仰し。あひか。其験もあ。んとして。然りければ。田村磨
 と。篤実の御生質なれば。御飲浅く。一。一枚ハ。そのは。は。速て。月雪
 姫の方小贈られ。一枚ハ。常小御身を放り。あ。み。な。の。り。つ。れ。初。て。正市
 と。世代惟も。是。その。厚。志。を。謝。し。古。郷。の。父。か。つ。と。白。鶴。公。羽。の
 許へも。消息細くと。言。つ。つ。れ。と。ん。明。と。延。暦。十。八。年。新。玉。の

春身ぬれば。都鄙おしな。て。門。の。松。竹。を。万。代。の。声。を。そ。之。兒。こ。り
 未通女子の。言。さ。も。賤。さ。も。花。を。饒。て。き。り。羽。根。手。鞠。紙。文。の。花。
 陀螺竹馬の。戯。止。も。いと。廉。な。れ。比。な。り。し。右。衛。門。督。坂。上。新。田。磨
 と。御。子。田。村。磨。今。年。と。や。十。九。歳。お。も。あり。ま。へ。月。雪。姫。を。迎。て。
 御夫婦。中。む。り。ま。じ。う。孫。を。も。得。め。り。老。後。の。娛。れ。不。及。と。
 頻。み。急。ぐ。せ。ま。ん。も。い。ぬ。る。頃。より。月。雪。姫。仮。初。病。の。床。に。臥
 め。し。より。そ。や。明。且。ハ。こ。と。せ。お。成。ぬ。れ。ど。う。も。と。茶。爐。小。親
 め。く。ハ。春。の。心。も。長。余。う。て。或。ハ。神。小。誓。ひ。佛。小。禱。多。く。も。更。お
 其。験。な。ら。ば。今。と。如何。も。な。ま。ま。に。術。も。終。ま。深。く。悲。ま。ひ。
 ひ。こ。も。日。夜。小。種。継。郷。の。り。と。月。雪。姫。の。安。否。を。尋。ず。ま。あ。ま。て
 あ。て。打。さ。ま。ひ。つ。れ。が。或。時。甲。斐。守。照。門。身。り。て。種。く。の。扱。が。り

田村磨

上

のりし小。新田磨ハ月雪姫の病年次経れれど。国守ハさうせり。
 神佛の力も憑甲斐なれり。打ちあれ語り多く。照門
 笑ふ。されどとよ。そのさすけをて。新しき事さるるの如く。近と
 聞われハ。三条橋の辺。世代他とろり。たて置き。器用を生活とせる
 者の家。延壽石とく。やろ。不思議の茶石とて。ありと。羨る。
 其實ハ。さう。かめ。知ら。げ。と。も。件の延壽石を。病ハ。人常。身
 に。添。く。弄。と。れ。ハ。日。形。く。び。く。平。愈。ハ。赴。き。氣。力。も。常。より。爽
 な。り。は。し。又。是。次。嘗。と。れ。と。よく。その。人の。餓。をも。救。と。う。や。誠。の。珍
 宝。な。れ。は。し。灰。一。匹。ハ。父。ぬ。鬼。母。用。ハ。尋。求。さ。ひ。く。其。證。を。様。し
 め。つ。く。之。姫。君。へ。と。あ。ふ。せ。め。も。夫。ハ。御。心。は。任。め。く。し。と。深。切。面。ハ
 わ。ら。じ。て。信。ず。る。ハ。物。語。道。ハ。新。田。磨。御。飲。浅。く。は。と。り。く。教。む

順。あ。る。し。と。答。え。人。ハ。照。門。ハ。公。の。内。志。を。ほ。した。りと。歡。ひ。四。方。ハ
 方。の。物。語。不。時。を。移。して。ゆ。り。た。れ。夫。より。新。田。磨。ハ。中。謝。不。仰
 て。件。の。延。壽。石。の。ゆ。せ。代。他。が。方。ハ。云。中。り。ま。ひ。て。遂。ハ。高。金。を。出。て
 買。求。さ。ひ。照。門。が。言。し。二。つ。の。社。を。より。く。様。え。め。め。照。門。が。語
 一。し。小。露。も。違。を。病。ハ。の。人。ハ。此。石。を。身。ハ。添。く。弄。べ。む。不。旧。し。と
 快。復。し。餓。る。人。と。是。を。嘗。て。勿。心。その。證。を。得。る。あ。ぞ。い。よ。く。飲。び
 多。ハ。侍。中。ハ。石。井。菟。人。貞。直。と。い。つ。る。者。其。質。廉。直。な。る。う。ハ。公。利
 と。る。者。な。り。と。ん。こ。の。所。以。を。審。み。云。合。め。多。ハ。中。納。言。種。繼。郷。乃
 け。と。件。の。茶。石。を。贈。ら。し。公。置。か。く。寛。く。留。め。お。れ。た。し。と。い。と。懇
 小。い。ハ。遣。り。多。ハ。ひ。く。れ。小。種。繼。々。も。歡。喜。糾。あ。り。て。菟。人。ハ。巨。細。ハ。坐
 多。ハ。い。く。数。度。謝。言。を。述。く。藥。石。ハ。止。め。菟。人。を。帰。さ。れ。り。夫。より

日本物語 卷之三

自是を携。月雪姫ありしりども解さ示し多ひ。彼延喜を
 ぬ人らしし。小姫君と羊を重し病の尤なり。かよりん双手は
 度うおし戴とふ。多君の深き。あつし。新田磨の志も
 か。びなど。飲ひまうて。是より。何れも肌を放り。其日と暮
 明日のわけ。二日四日と。ころみつけ。不思議や精神次第く。爽
 物食。あふ。五味も濃。その味を。終。一七日と。頃
 忘。が如く。夢の。れが如く。陰陽の二氣。上下。回。て
 氣力。じ。十倍し。終。全快を。得。ひ。れ。姫君と。さ。り
 新田磨。種。継。兩公を。じ。め。あ。家。上。下。の。終。ひ。更。ふ。い。え。く。も。あ。り
 と。雲。霧。か。と。忽。消。る。朝。日。の。じ。め。て。蒼。天。を。照。さ。か。ぬ。喜。悅。の。眉
 を。開。き。こ。と。ろ。り。あ。れ。是。と。い。つ。る。も。千。手。觀。世。音。の。德。象。不。信。し

あ。ひ。し。よ。り。佛。の。加。護。空。し。か。ら。ん。且。と。照。門。が。志。も。至。る。所。あ。ん。と。
 両家深くも觀世音を謁仰さし。多。れ。と。斯。て。新。田。磨。を。急。免
 使をりて。甲斐守照門のり。と。い。る。の。は。し。と。告。げ。れ。懇。ふ。一。禮。を。述。て
 所。の。贈。物。あり。し。小。照。門。の。却。り。し。と。入。り。風。情。あ。り。彼。お。石。の
 り。の。聊。々。傳。え。れ。浮。ぶ。物。語。也。而。已。な。れ。を。斯。て。懇。の。終。り。あ
 と。を。懇。ふ。汗。を。ぬ。り。な。り。と。て。使。者。を。款。待。厚。く。礼。を。述。て。返。し。ら。る
 が。公。の。内。と。暗。に。計。し。よ。り。成。就。せ。り。と。刑。部。太。郎。と。只。二。人。嘲。々。ひ。り
 々。と。惡。さ。り。し。る。の。も。あ。り。去。り。お。件。の。延。壽。石。と。種。継。卿。よ。り
 新。田。磨。の。り。と。厚。く。礼。を。述。て。返。さ。し。と。な。ん。それ。が。月。雪。姫。の。病
 頓。ふ。愈。々。と。日。に。健。な。り。し。う。ば。新。田。磨。此。より。只。々。あ。り。て。限
 な。く。終。び。あ。ひ。と。く。入。喜。め。り。な。と。昔。と。元。老。佐。々。木。氏。部。忠。順。と

命じて審中贈らむけれ種継卿も元より約束云月雪姫
 も今年居特の月の眉花の顔散初ね盛なれば速も肯なきひ
 延暦十八年の夏より所奉教歩ひて月雪姫の田村麿の元入裏
 ありりね梅と檜のさも香もあつる人ぞある等々宮の間の襖の風
 ざらも流ぬむりの玉契りぬ御中いと睦しく在りやと両家共歡
 壁見くらねく千代万代と榮むひり然る小善惡を是れど
 繩のこく爰よ一の凶事こそおぼえられたる能天皇の東宮早良
 太子ハ邪智深く御公直るれば同志相得の古語のごく弓木
 甲斐守照門を深くも愛しむひ暗も早く天下とあらし百とんと
 御謀叛の思ふにわれど元よりさく洩しあられども照門あつる
 此を傾けし仰ぐとありされが逆臣ハ諂ひ忠臣ハ良茶の口は

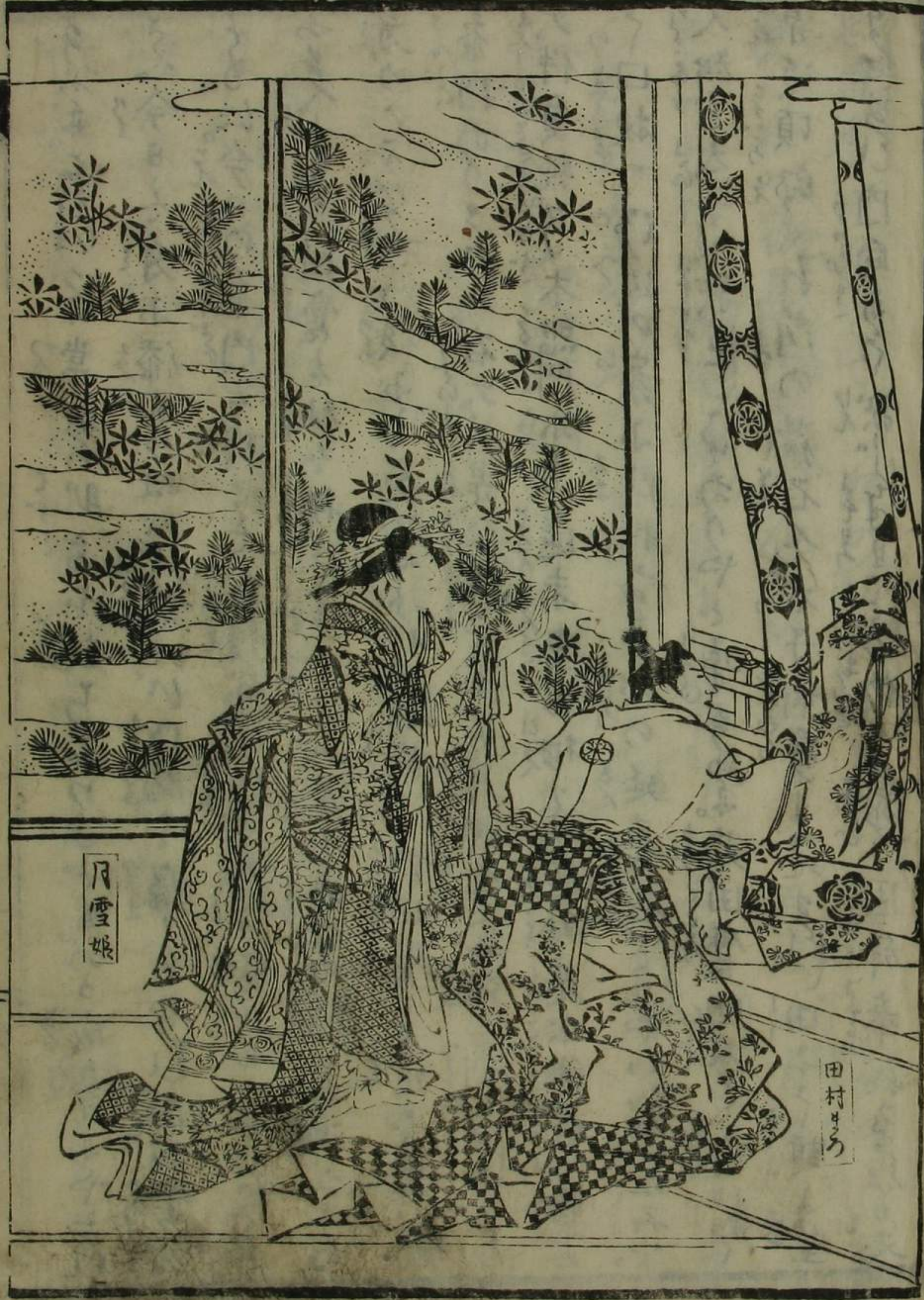
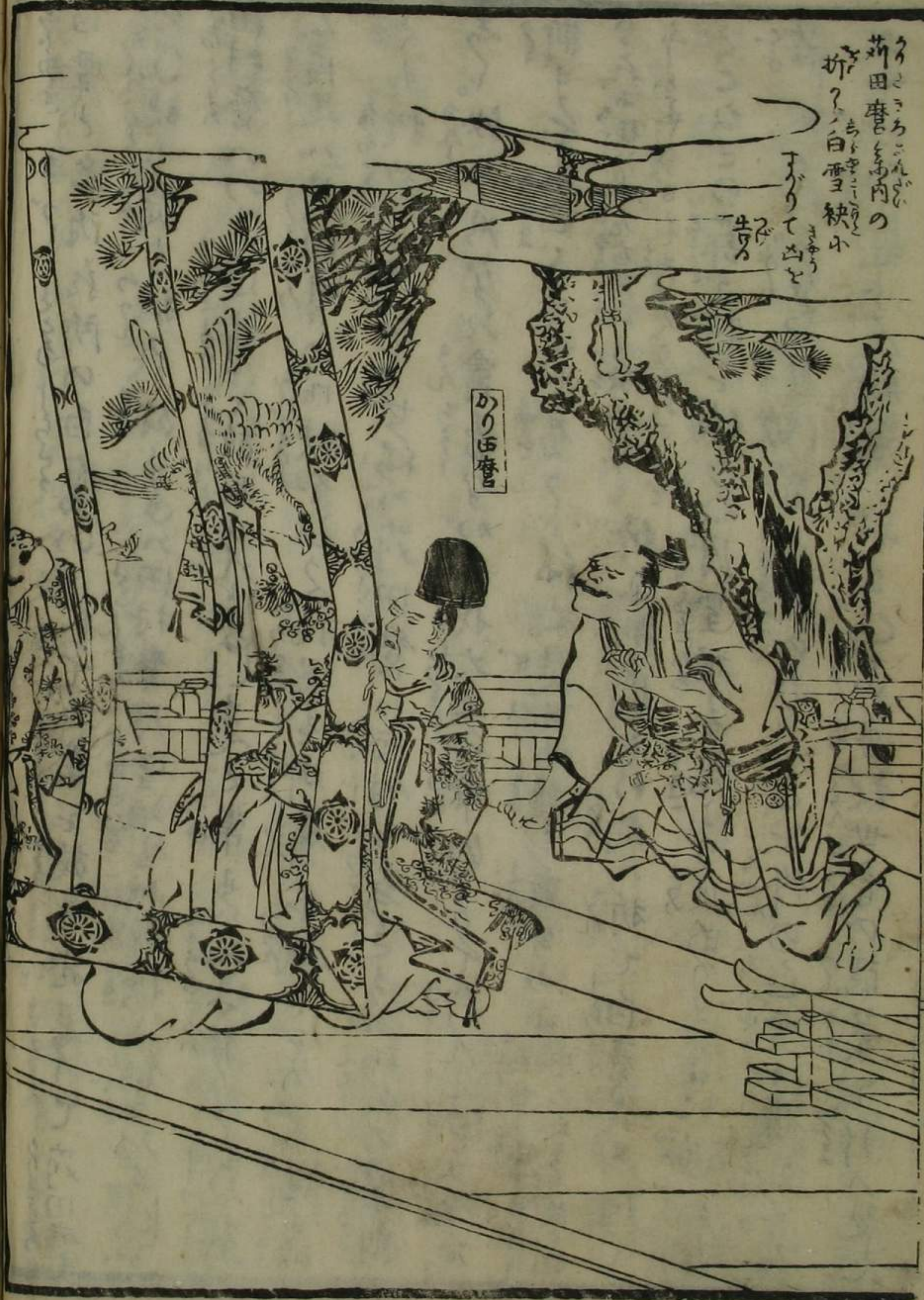
武將蒨田麿のころハ竊小御公赤赤りければ此圖ハ計り
 甲斐守照門ハよりく蒨田麿御父子とありしに彼も次
 なれりのとせば心ハ随ふ者も多りねばなど彼浸潤層受の巧
 をそしりされが遂に照門と公を同めあむひらそ口惜とたど照門
 と深く示し合され此秋早良太子病小即多ひるはしめて典茶
 以の移くと此世をさすれども元其化りなせれ御病あり其
 驗なく天皇も宸襟を悩はしめひられ風与太子の御愛ふ
 蒨田麿ののちに不思議の茶石ありて社人の病を拂ひ鐵を止
 るの妙ありは成知せめあ旨めて是を領中奉れと由の密
 命下りて大伴高貫ハ使を差りて坂上の館ハ伺公てさく
 差上るさの赴を巨細ハ傳れ蒨田麿ハ色々と候思し

とも。早良太子の尊命黙止が。あつたも御請は奉りて自
 件の延壽石を携へ東宮の御許ふりかりて。謹でられぬ状に臣
 菊田磨いぬ頃此茶石を手に入る二年不及る某が娘の病
 も少し愈その外證のたつて眼前えつれど。されどて是を裁る
 るの亦極くぬるしめられ。猶典藥頭その外にも仰りてを
 をも終つて尋ありて後免も角もはしむと。其所以を具不
 解終つて捧ちめられしに早良太子の人をりて。件の延壽石納め
 らひ。さふの仰りて菊田磨へ。御館あひつれ。然るふ二日を過ぐ。
 右大臣藤原の是公卿より。御使をりて宣旨のたれ。菊田磨と只
 今参内ありと。笑へ。何事あやと公驚うせむ。取そのも取め
 ど。急ぎ出んとせられ。往る御狩の御時天皇より。田村磨より。

白雲と名附所。の白鷹い。して。架を放し。飛りて。菊田磨に
 の伊袂を睨と。抵。放。田村磨。月雪姫も此有。扱。不。然。まじ。う
 田村磨。いつと進寄。放取らんと。さし。多。常。あ。松。子。替。り。く。白。鷹
 を。氏。足。ハ。菊。田。磨。の。伊。袂。を。ひ。久。斤。足。を。御。簾。を。扱。で。その。身。逆。成
 とも。放。放。ら。り。わ。ら。せ。給。へ。菊。田。磨。ハ。斤。付。も。急。と。ま。あ。公。の。繁。劇
 なく。汝。ら。汝。な。れ。禽。多。が。我。大。王。の。命。に。よ。り。て。行。ん。と。ま。る。る。ん。だ。
 斯。く。て。お。惱。ま。る。を。易。く。給。と。是非。放。ら。取。ら。ぬ。小。中。の。氏。より。放。し。給
 へ。これ。お。後。つ。た。右。の。氏。も。放。れ。ども。後。お。扱。に。し。その。氏。ハ。折。て。白。鷹。の。志。向。く
 と。こ。る。こ。の。世。部。は。羽。を。休。め。ね。月。雪。姫。を。先。より。此。あり。こ。ま。に。清。公。の
 若。し。せ。あ。ひ。つ。ち。や。其。伊。が。お。災。の。あ。ら。と。と。件。の。白。雲。が。豫。知。を。た
 せ。や。と。何。と。中。人。胸。驚。く。せ。ま。ひ。ふ。手。記。世。音。の。隠。筆。を。拜。ん。と。し

新田磨を内の
折り白雪三つ缺けつ小こ
下りてはと
生まる

のり田磨



月雪娘

田村

ありき。このいふ事常あ肌を放らむりども。いふ成る事やとれ
 へ今日を身小添りねば。人知らばは胸を痛しむらひ。田村磨諸
 とも。今日の泰内を得ると公得孫と何うか。奇止りあせこと
 あ多人も。新田磨と袖を拂く立出する。是ぞ此世の別。神あふね
 身のそふか。後あせあひあられ。斯く新田磨と道を急れて
 泰内ありとれ。右大臣是公郷をじり。月郷雲客袖を列て坐。み
 大伴貞純弓木照門ホも。遥未座あお。其肘是公郷眉を擡。し
 曰。扱も伊辺の家小所持。と処の延喜石とやいへる。茶石と
 人知と太子へ執。しりわりやと尋。あふ。新田磨回答て仰。れ。く
 某近頃。おれ所の茶石を太子御夢よ。え。由。小。頃。望
 せ。あ。い。内。向。り。執。し。ま。し。の。仰。を。業。り。固。辞。奉。れ。る。事。も。又

忠懼。あ。あ。れ。が。と。て。い。う。程。の。切。能。き。茶。石。な。り。と。も。外。の。事。も
 違。れ。ば。容。易。捧。ち。も。ん。も。い。う。好。ふ。ん。と。百。度。亦。度。愚。慮。あ
 め。ぐ。し。え。も。最。命。頻。な。れ。は。し。め。れ。を。し。く。ん。各。な。じ。て。奉
 ら。ざ。れ。ね。あ。も。ま。へ。て。ん。も。亦。也。と。あり。と。頓。小。捧。ち。れ。と。は。り。と。も。
 返。と。ぐ。も。茶。石。の。能。い。よう。く。諸。人。も。其。實。を。問。せ。ま。ひ。て。こ。そ
 と。御。請。は。し。奉。り。な。り。と。老。實。面。は。顯。し。て。笑。ゆ。り。あ。そ。是。公。々
 又。曰。實。も。御。辺。の。ヤ。さ。れ。所。も。其。理。あり。然。し。も。その。事。み。付
 一。大。事。こ。そ。起。り。われ。その。執。ら。じ。延。喜。石。を。典。茶。改。且。は。た
 右。の。人。も。西。之。人。是。を。試。と。く。身。體。を。授。或。は。み。會。な。じ。せ。あ
 其。夜。典。藥。頭。を。始。め。試。せ。し。西。三。人。皆。胸。痛。耐。じ。て。終。り。昨。夜
 同。病。死。せ。り。し。み。總。身。皆。紫。は。變。下。齒。を。か。じ。め。眼。を。又。開。き

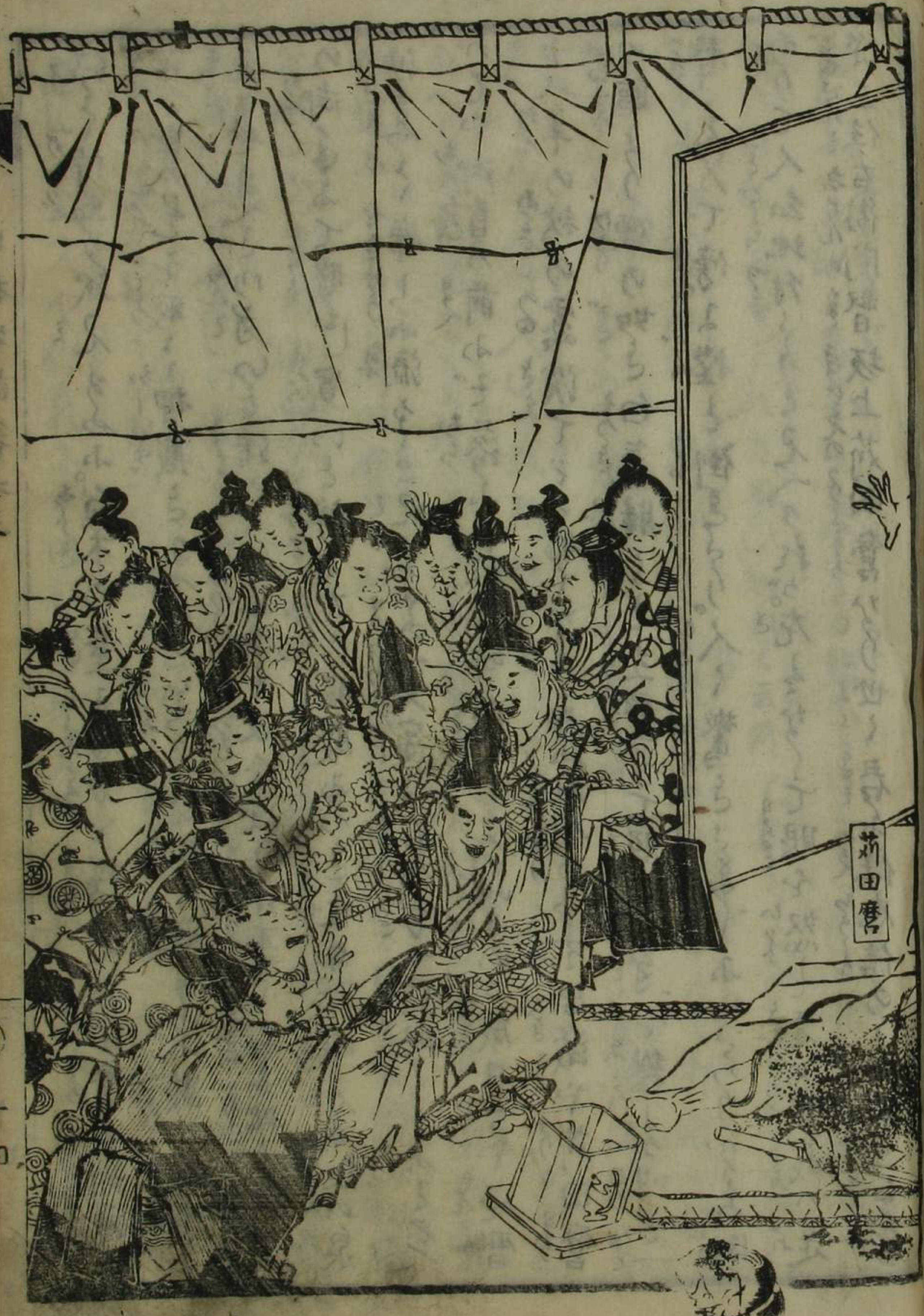
されし疑の處もなれ毒石なり。是をグて是は御辺竊ふ
狀らしむ。密命とのひなき其職の人ふ何とて後小を免
おも角母も為ぶつたり代其ももそとて杉ふ狀らしむ。倉卒
と而已しひがう。輕ううたれ處なり。將太子の御怒り大方うぶ
天皇おも御疑ひ解されば其罪逃る處なし。されば王道ふ私に
と則仁政の本なれば。教代の名家ハ惜せせまふといふも。生罪赦
かこや處なれば。死を給るなり。潔よく切腹はして。教代の君恩ハ
謝せらる。又田村磨磨ハ此奉り拍とといふも。父の咎ハ洩れと
社ど伊豆國大嶋ふ流さされとの宣旨なり。其外親族家長ホと
仁慈をりて御沙汰なれの旨なれば。早くに其用意ありと
是公卿も眼中涙雨のどく止むを得る。君命を傳へるふめぞ。

月卿雲宮も俱ふ袂を絞むかりなれば。大伴貞純弓木照門等の
内公も笑を合といふも。同涙ふかされぬ。是れと照門も早良
太子と謀討を合せ。彼茶石を太子より仰ぐ。暗ふ炎て試させ
まひし故毒氣盛ん。人を毀しとなり。斯く新田磨磨を聊も悪
びとらつと。謹む畏り奉れと。而已御請ありて。あひ奉り。過
も。時至りて。天命道なれ。ことろり。思慮あり。たり。返したる。あ
御言葉も形く。其座にさす。しよ。や。敬言固の武士ども。新田磨磨引
を。御廓の外に押出。兼く。儲。飯の別屋ふ。よ。用意備。し。
一間の下座。新田磨磨を居。め。られ。
第六回 忍夜の跡事
斯く正面を儉使の役大伴貞純弓木照門との外九右。列居。敬言

固の武士と帷幕の外に居し。今錯の役後、和自張の屏風を
 小引廻し。真白の幕風をあきりて、毎常の浪やまわす人、其時大伴
 弓木は言ふと和ふ。斯某等、検使の役を蒙るといふ人も、是非も無
 りゆし、われは責むるや、殊うも事もおぼは。我等よれお侍とあはせ
 と、われは、菊田磨の心の内、件の延壽石ふこそ、たこそ謂、あはれを
 幸と、照門等、しらくと奸計を設く。我を棄のころ、数代の家を、
 滅ぶるや、いふ成怨のありて、斯や、てハ計ひつるや。そも我智の足る、
 より、彼木が毒を、お落入と、いふも、家を亡と、お至と、いふは、口おし
 こそ、此怨なる、其侍、お壺を、とやと、張割は、胸を、静め、あは、
 日、この、別よ、至り、ても、控各の、厚志、い、い、む、り、月、お、飾り、今、更、中、残、と、
 つと、奉、し、な、れ、と、去、る、が、筆、紙、を、昇、給、り、は、一、首、を、残、し、と、
 機

等への、匠、とも、な、して、ん、が、此、奉、し、う、あ、や、あ、ん、と、同、ま、人、が、真、純、照、門、に、
 入、合、の、奉、而、已、お、い、ひ、を、何、久、苦、し、か、ん、某、等、より、能、お、田、村、磨、へ、
 何、人、を、お、と、せん、い、と、と、く、と、毛、頼、文、池、を、菊、田、磨、の、前、へ、進、め、
 せ、お、お、辱、し、と、宣、く、と、書、終、り、た、め、は、是、を、田、村、磨、へ、つ、と、
 あり、れ、と、差、出、し、お、め、を、取、お、げ、と、い、ふ、
 かり、それ、の、ゆ、こ、う、ひ、踏、と、ぞ、お、い、ひ、
 此、歌、は、是、在、原、の、あ、げ、も、る、が、甲、斐、國、お、あ、ひ、知、り、て、侍、り、
 と、て、ま、う、り、け、れ、道、中、お、て、俄、お、病、ひ、重、た、り、と、お、り、
 右、衛、の、母、の、り、と、お、送、と、れ、右、今、集、お、載、る、所、の、お、な、る、と、
 なる、御、と、お、送、お、や、篋、と、お、し、お、い、ぬ、る、ハ、後、お、お、
 け、し、と、そ、斯、く、時、刻、う、つ、直、お、お、
 真、純、照、門、は、一、圓、お、と、
 田村物語卷之三

日寸刀五...



新田磨



大伴負純

新田磨
別屋
生害

弓木

へん 持切り 又もあふ。白木の臺に短刀を横置き、苧田磨の御前ふ
 さら金ハ見を取、押戴とあつて、一文字を脱ぎ、諸肌を脱ぎ、髪ハ耳順に
 さらせり。と、清らうに氷を、又を逆手小取り、右に按し、左
 の御前ふて腹に寛いし、静に左の服腹のつとを、唯、紅の泉
 湧き、席上流る、と、はか、一文字、右の方へ引廻り、と、と、
 かと、御首の前、おそ、落ふ、れ、嗚呼、傍りの、此日、成日、や、延曆
 十八年の秋の露消て、うろ、お、なり、あ、此、打り、不思、議、や、苧田磨
 の、軀、より、煙、の、如、く、白、氣、臙、と、と、立、登、り、て、照、門、か、守、を、纏、り、が、叫、び、こ、
 聲、さ、んで、傍、に、撞、と、倒、り、り、り、人、く、驚、と、と、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 ありて人、公、地、付、り、と、見、へ、た、れ、が、左、と、な、つ、て、眼、を、怒、し、牙、を、嚙、我、は、是
 從、三、位、右、衛、門、督、坂、上、苧、田、磨、なり、世、く、君、お、仕、忠、信、の、よ、し、て、二、公、あ、

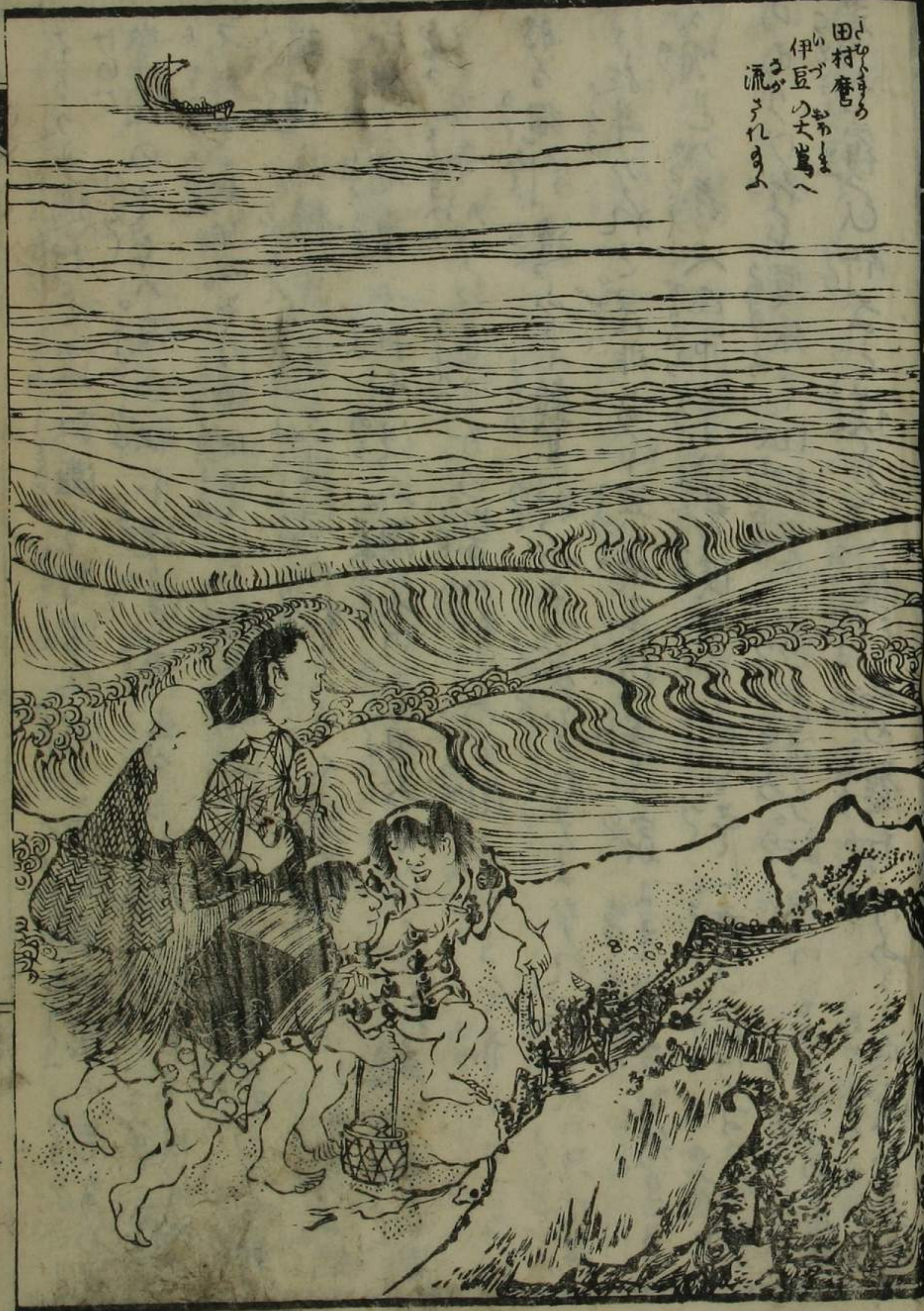
ざ、れ、ふ、一、且、汝、が、毒、手、れ、落、入、る、怨、い、う、り、其、俣、小、捨、る、と、も、着、此
 報、の、あ、れ、う、あ、ぶ、れ、
 お、き、落、し、れ、苧、田、公、上、免、さ、せ、身、と、進、迷、ふ、を、有、合、人、く、打、寄、て、漸、と
 抱、き、上、め、先、こ、と、ろ、を、慎、む、し、と、を、照、門、か、館、へ、と、送、り、帰、り、け、
 是、と、る、人、々、人、い、う、成、所、以、ハ、あ、る、が、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、
 あ、り、り、れ、
 の、館、小、入、り、あり、苧、田、磨、如、此、く、の、罪、あり、て、今日、死、を、給、ひ、切、腹
 せ、せ、し、次、亦、亦、田、村、磨、ハ、父、の、御、咎、め、候、る、事、能、な、れ、ハ、伊、豆、乃、
 大、鳴、へ、流、す、ま、は、し、の、宣、旨、を、巨、細、に、述、其、外、の、親、族、家、臣、等、ハ、深、
 と、御、咎、を、以、り、御、咎、の、沙、汰、及、び、れ、と、早、く、一、族、の、方、小、退、去
 を、し、と、公、文、を、傳、れ、あ、ぞ、田、村、磨、御、夫、婦、を、じ、め、世、臣、の、輩、ハ、見、

泣き入りて半打伏す。號哭の声地を動とも理なり。田村磨
 とありののり唯惘あられて暫言も出らざりしが漸々
 溢れ涙を押し以語を演んとほし。今時貞純を争も日宣言を
 言波らへ暇く何談ふれ謂ふし。將此一首を新田磨死に臨んで
 書せられを我に心再汝は送り届ふれあり。今日只今より庶人
 とたれる田村磨なり。早く配所へ赴くべしと。せよ支まが貞純の
 手小随の族むらりやと支厘に田村磨を引立行んとせよ。月を
 娘とのふ愁や情の人のよ父とも憑とあり。され舅の心は寛
 の罪小御生害なしまひ長と別となりぬる而已。我夫も遠
 嶋子流されりんよ。そも何素の故あり。此上の虎野辺鯨奇れ
 浦なりと。妻一人残れぬれ警命の緒と殺れとも。何所もくわを

離りてとせんと宣ふ声は涙小夫とせしむと艶と御手小田村磨
 の細い。入りり入るり。中敷とあり。理とあり。そのん。同
 哀とあり。田村磨も御声曇り。父上年頃日比忠義の心あり。平
 彼葉石を余に應じ領小状らじしも。太子の心病ひ早くも平
 愈ありせり人と一節小あり。事記あり。少しく御過われ。逆
 心身を亡し家と矢ひあり。至れ。何のそ。その中。奸邪のこのの
 ありて。當家小怨をうると。半日と元老佐。木民部忠順
 進出。両眼涙腫らして。双目をほく。今更何ぞ。此場おわく。白れを
 罪在。其を。其を。今更何ぞ。此場おわく。白れを
 論。黒を算。之ん。今更何ぞ。此場おわく。白れを
 目時をりて。田村磨小夫と言わぬと。つけ奉。早くも其の心

ぬほしものいふも宜旨と蒙るる人の免や角といふ人なむ人の今
 への忍あり。さうく彼地へ運べし去むがう爰に二つの願あり。一つは父
 苅田奮の遺骸を厚く葬らる。又一つは遠つ嶋の畝にふ一両筆の
 家臣をおく行入るを免するんやと仰あはれ。負純りらる。其二つ
 の望も任さへければ。葬の礼を行へんとて夫も一日と費する
 と叔おれ財を移るもさうしむがれば。所なれば。珍とする者も託し金で
 早くさうさるべしと教度の女但ふ是非もねく。いつまで名残のほせ
 依、木民部母何くれと跡のりもをさうさる。さうさる。則民部を月
 姫の傳多ひ。中納言種継の許小房りて。志は角持節を待たる。又
 天皇より給りし白巻を。月雪姫民部諸とも大切小心をけけよ。石
 倉へ関山市の我小扈後あるべし。その時のやが臣の一族いふ。

るしと。仰もさも中流川流の末はいつかそや。いつか連瀬の村もさ
 と涙も曇る月雪の消も果るん此月さうさる。待年月の長れ
 袂をかり分りて。田村奮の住訓もさ。誰を生まぬ。庭の梢も別と
 なれは哀をそへ。そのとも知らぬ大嶋の配所の空へと旅立ちの脚を
 そ。其行人も止れ人も哀れ。いふ夢もさ。ね。浮世の夢ぞさうさる。
 斯く田村奮主従二人のすうと都の空を跡よほし。警固の人小
 導と伊豆園へとさうさる。明暮して行後ふ。涙せが矢指の渡
 浪もさ。楽浪や矢橋の舟れ出ぬ。糸おくれじといふ。か
 人ど彼公朝かつ。福しも。我はさうさる。旅衣石部水口土山。さうさる。
 伊勢路よさ。かれば。鈴鹿山を右よさ。坂の下より安農の津よ
 至り。是より。糸おくれ。阿漕の浦。二見の浦を馬子よさ。浪路



田村磨
伊豆の土島へ
流るる

田村磨



田村磨

岡正市

石井藏人

田村磨

十七

とるうか過行を遠江灘も打送り。潮と伊豆國大嶋は着ありふ。
警固の、くく、直ぬねを返して漕ぎも。帰る帆影も遠く付の
不祥を哀なる。その頃此嶋も人家稀にして。もく、澳家あるも。軒
端傾き。壁荒果只浦風の松よ音を添る而已なるに。柳岸よ網
を晒し潮痕も舟を洗ぬ。漢父のさ唄も。なごれ声の淋しく男
女とも弁がたの童ももの髪はかたも風も動きて赤く。さごあひ
形る縄引違ふく戯をたぶると哀なり。さなれば。さ人の只忙然
うたふれ。是非あり。其の夜も伎等が家よ主従を結ぶる
つ。明日も若人市等ハ是彼とく。路をさし。幸ひ怪げある彼家
のありけを。買承る。田村磨を移して。軒端の。さり。自足ふ
薦打覆ひ。竹など。横へ。縄引あり。薦打拂く。雨洩ぬ。

と成われど。間次りれ。馬の浦風も。錦の戸張も引く。蓮の簾も
夜寒を凌ぐ。煤と。あつ甲斐な死。侘住居昨日ハ雲井の死。笑
今日も孤嶋の月。怨夢の世の中。憂こと。の。ら。中。あ。且。あ
濱邊も。渾を。と。或。武を講。螢雪の窓。ハ。書籍と
論じて。心も。漆。ね。月。日。過。も。ひ。く。く。も。弓。木。甲。斐。ち。照。門
。我。能。み。を。房。り。て。漸。と。と。落。付。只。後。の。え。る。お。地。あ。り。あ。り
。速。よ。志。願。と。遂。し。め。を。改。ひ。刑。部。太。郎。へ。あ。ま。さ。の。恩。賞。以。て。已
。お。組。せ。し。大。伴。の。貞。純。大。伴。の。高。貫。等。を。も。招。き。て。彼。等。へ。も。あ。り
。の。寶。貨。を。贈。り。て。俱。み。飲。ひ。の。酒。宴。成。る。し。た。れ。悪。逆。の。経。を。怖
。け。し。と。あ。り。あ。り。刑。部。太。郎。ハ。照。門。ハ。妻。白。波。と。借。光。同。定。の。契。文。を
。され。も。人。目。の。園。の。多。け。し。ハ。流。石。も。流。の。佐。う。い。く。ふ。も。此。上

照門をうけ物にして。よほど掌を握てんとおろし。その便も
 打過をたす。つらも夜に白波の左右人小妙といふ。導
 て彼が部屋へて白波と忍びあへし。つらの経ある照門を此小妙
 の顔顔色をれ小懸想して。手をかぶる威つ。口説ども
 小妙と名へ角言拵。當り障を其場。外しつれ。いよ
 く照門へ公せり。此上は是非お彼が卧房に入り。我々の浅
 めぬをも添くと。語らんか。なごる一息の情あり。彼も
 赤心より我々敵つめもあるは。好む。我妻の面を兼ねれば
 請ひ。れも謂ふれば。非と。已く。病お自他成さうて。擲
 うまつ。或夜白波お語て。吾を今宵兼ふ。信ざる神お
 いうめも公願成就を行へん。故に小院に宿して。宵通知を

すると。つら子細めれ。御衣を我と待して。早そ。臥入る。そ
 常より。袴を清め。衣服を改め。れ。其丈低く。飽まで
 肥大りて。肩のいろ。我と我を。愛する。心より。竊み。え。れ
 鏡も。恥る。別殿は。して。出行ぬ。白波の。渡り。中。松の。お。出。る。嬉
 め。今宵の。首尾の。又と。形。あ。も。あ。は。く。と。消。息。を。な。し。と
 刑部。え。よ。ひ。ち。り。て。三。更。の。鐘。を。相。圖。は。小。妙。が。部。を。あ。て。い。り
 その。あ。ら。び。連。ん。と。の。み。な。れ。刑。部。を。と。れ。と。や。う。も。り。し
 二。更。さ。る。に。早。く。も。小。妙。が。部。屋。へ。と。忍。び。入。ぬ。照。門。ハ。斯。も。あ。ら
 び。別。殿。に。あ。り。て。静。れ。時。刻。を。考。へ。冬。の。夜。に。待。ち。長。た。ぬ
 の。闇。さ。ら。の。闇。の。抜。足。も。我。家。の。扉。の。音。ふ。と。裏。く。胸。の。横。櫃

男、馴、勝、手、の、小、妙、が、都、屋、燈、火、消、し、天、の、助、け、結、ぶ、の、神、の、引、
 合、せ、軟、今、宵、此、音、尾、の、吉、兆、な、ら、う、と、一、歩、を、上、ま、が、一、歩、を、扱、入、千、辛、
 万、苦、の、灘、を、こ、小、妙、が、都、屋、入、り、何、中、ん、此、方、の、用、小、人、り、を、
 忍、ぶ、足、音、す、れ、が、い、ぶ、し、と、い、ふ、人、も、若、く、は、小、妙、が、早、く、も、我、と、推、
 察、し、て、お、も、と、ゆ、と、に、隠、り、母、や、道、の、せ、じ、と、探、り、し、て、卧、房、の、中、お、
 手、を、は、し、入、り、考、え、ば、通、り、し、入、醒、中、で、是、の、空、蟬、の、床、の、中、こ、こ、
 こ、そ、彼、が、聲、を、も、挙、ご、恐、れ、ら、る、既、半、の、大、形、成、就、せ、り、尤、あ、ら、ば、
 探、り、あ、ら、じ、と、目、刺、も、知、ら、ぬ、都、屋、の、う、ら、に、大、手、を、ひ、ろ、げ、忍、び、く、い、
 尋、る、に、尤、と、探、し、右、お、替、と、忍、ひ、の、足、音、照、門、と、あ、ら、り、に、公、忙、く、
 暇、と、い、ふ、の、口、お、し、こ、よ、く、何、ひ、さ、ほ、し、て、飛、り、い、は、さ、う、く、と、ま、よ、
 大、男、の、ひ、れ、節、く、松、の、樹、の、柱、も、か、く、や、と、照、門、の、大、お、駭、と、こ、の、妖、怪、

欽、曲、者、を、居、會、人、と、こ、こ、を、限、り、と、呼、ま、れ、ば、件、の、曲、者、こ、れ、も、乱、と、
 見、答、ら、れ、て、一、大、事、と、逃、ん、と、す、れ、ど、照、門、の、袂、を、睨、と、放、ね、ば、こ、の、
 面、倒、な、ら、う、と、曲、者、と、金、剛、神、の、力、出、し、照、門、が、髪、爪、抓、り、引、き、お、
 こ、ら、れ、こ、も、使、ゆる、強、力、な、れ、ば、あ、り、や、く、と、捻、め、し、小、曲、者、が、カ、ノ、敵、
 が、こ、の、傍、お、こ、と、と、投、つ、け、ら、れ、と、ま、り、も、あ、ら、ざ、ら、ぬ、と、先、刺、消、
 滅、し、行、燈、の、骨、も、牙、も、よ、も、碎、ら、る、む、り、地、響、し、て、こ、を、倒、し、母、
 を、持、お、こ、入、り、あ、れ、ば、天、の、岩、戸、の、神、あ、ら、う、と、顔、打、ん、と、照、門、刑、殺、
 こ、の、い、う、あ、と、人、く、ハ、驚、く、困、お、刑、部、ハ、ひ、ろ、り、と、牙、を、か、し、袂、の、
 下、を、か、ひ、潜、り、こ、の、行、跡、も、知、道、を、な、り、に、な、れ、ハ、珍、ら、う、あ、り、亦、
 願、解、あ、り、こ、の、ま、形、り、白、波、ハ、公、お、こ、ら、う、と、あ、ら、も、尤、あ、ら、ぬ、顔、あ、て

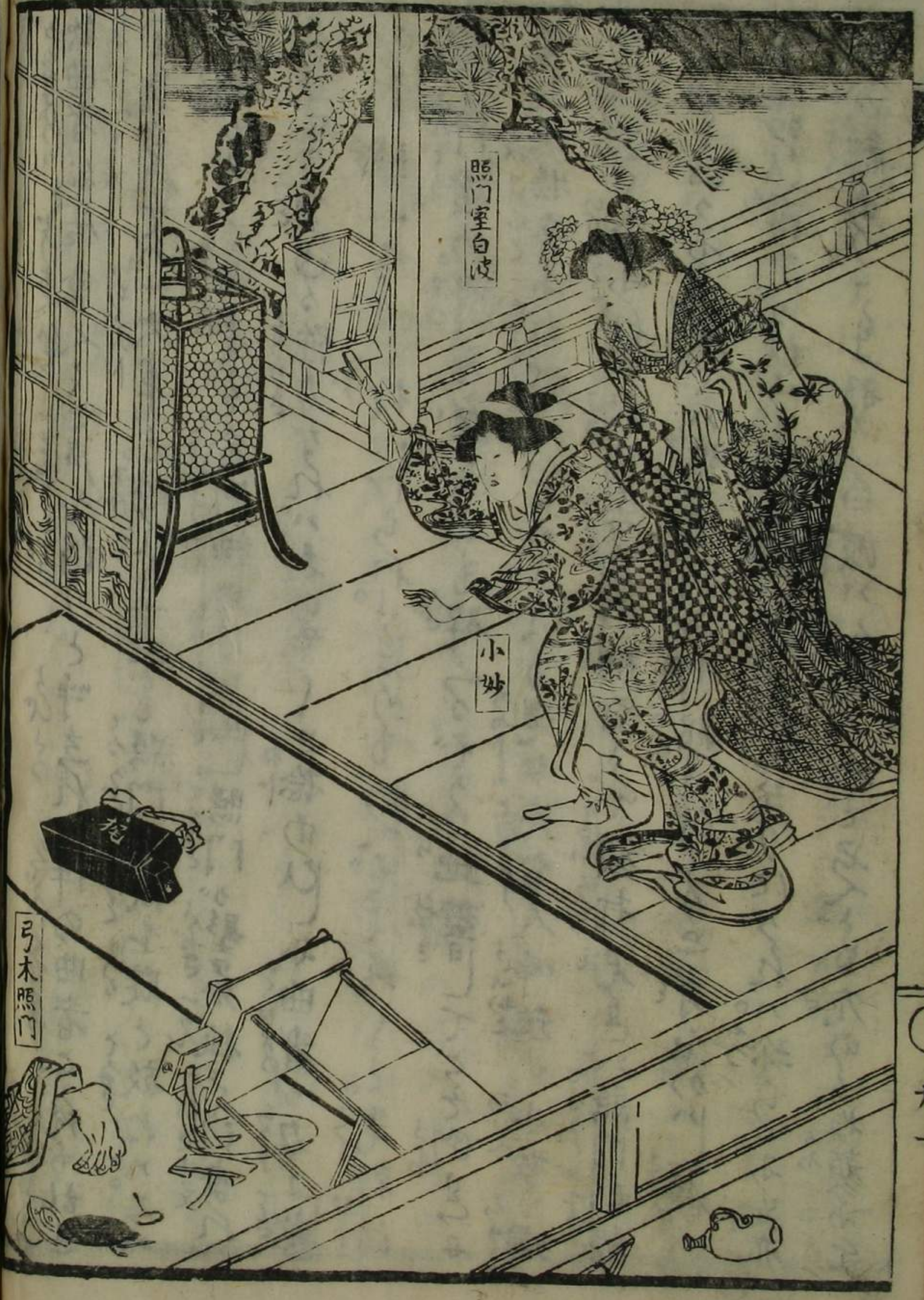


小妙部屋不圖
兩士顔合在失
面目

岩岸刑部冬郎

日本外言卷之三

七二



照門室白波

小妙

弓木照門

日本外言卷之三

九一

刑部右衛門。いふなれば此部至よ忍びしや。正しく小妙小懸想と見えたり。然れども小妙の幼きより。妾が左右小成長てその公聊乱じたり。今宵も既よ卧ゆる。一度も部屋へ行かぬ。假令君の意慕しあふとも。やう請引しは。まかて醜と刑部を即おのを通さるるのあへるべしや。そく刑部太郎次郎。あひねじ將君の今宵兼を信じあふ神を禱りあふ。となれし小院。通夜去あふ。心をそくせゆとこそ宣ひしが。何はして。此小妙が部屋あふ。ありあひし。君もその公根こそ疑ひし。けしと。己が不義を。余所よ。し言と巧。打怨尋ね。照門のあひし。言も。心然として。頬のこころ。や。あひ。救度瞬息して。免や。らん。か。や。答んと。あひ。漸と。後思を定め。実も。疑ひ。あふ。道

り。理がれど。我宵より。別殿あ。りて。公。祭文を讀と。丹誠を凝し。居る。奥の。と。影の。写。正しく。男の。人。糸。な。れ。外。夜。深。奥。向。よ。人。の。出入。を。謂。し。と。不。審。な。れ。と。暗。小。の。跡。を。慕。ふ。て。あ。り。し。小。妙。が。部。屋。小。何。中。人。物。音。を。聞。く。人。を。呼。起。え。ん。と。夫。と。定。め。る。る。も。形。さ。に。こ。と。ぐ。あ。の。討。つ。も。い。う。お。ん。と。忍。び。し。て。彼。が。部。屋。の。裡。を。窺。ふ。と。燈。火。人。消。て。盗。人。の。忍。ぶ。る。ま。な。れ。ば。組。留。し。に。そ。ら。ら。も。是。岩。岸。刑。部。太。郎。な。り。と。い。言。語。お。殺。し。れ。次。弟。あ。て。正。しく。小。妙。が。忍。び。男。あ。の。果。し。て。刑。部。が。賊。心。を。起。せ。る。に。疑。ひ。し。し。て。足。と。捕。て。乳。と。し。と。そ。く。に。表。の。方。お。走。り。行。く。そ。の。驥。を。頓。お。静。し。し。と。刑。部。右。衛。門。免。お。角。之。が。れ。刑。部。父。権。太。夫。を。捕。へ。て。色。と。

尋同中權大夫を刑終せしむる替りて公狭き人なれば大に恐懼心を
 苦しむ。某の如く刑終太郎が才持の不善のゆゑに折れぬ。折れぬ
 おきて教諭を加へる。吾も小導少少の面めん得心せる色を顯せしむ
 る。てこゝろを改む。遂めんかされし。大に苦しめて父よりて面なれ目次
 又これ不孝者よと怒りつ。侘つ回答。人涙じぶむじくう。其
 夜終不權大夫を自殺せしとそ不便なりし。むもなり。是ひと小
 刑終を郎が至愚より。親をも亡人の数とまじゆる。天罰いくて逃れ
 るのゆゑんや。斯て照門ハ此上も強て。求るに征の罪もあつたれば
 ぞ。其ゆゑもぞ打過されと。去後小岩岸刑部ハ小奴が部を
 を走り出我宅小歸せし。が。後忙しくあり合少しの金銀と衣類
 多も手あて次第に引擲す。そこにも知も走り出しが都の内

後わさやとひん。是より伊勢國へと志し。縮地の妖法を行。道
 急を走の行たれ。勢州鈴鹿山の麓に至り。お
 頻り中心地燃しく發熱して。終に癩疾に侵。一歩も行
 社に元身止れ所。何の方へと志せし。ゆもあつた。急迫し遁出
 たる旅路なれば。如何ともせん。山の本陰に破れ。け堂の有
 多れ小宿りて。自病を厭めてあり。其夜三更。比西之人足
 音外面の響をき。何やん。軒の月。け堂の裡を何ん。子あり
 其内一人が。つる。を。鐵棒二も。俱に力と合。其
 彼い。勇力あり。足と。語。又一人のへら
 何を鉄を待。や。我等二人が。下。首尾せ。や
 と勇進を。一人も。仕。上策あり。勇威の

不連行つれゆきとまりまじしごい五躰ごたい叶はりと行歩ぎんぽもころろは仕し廿に祢ねがをと人
 に頼たのみをかりすれと折をりをこも憑たりをれを母を然しからばを兔うよを角かく連行れんぎ
 是こしを明あるを程ほどもあをるをがを急いいでを山やまにを帰かえをんとを四よ人にんらを奇き引ひ
 寒さくを山やま路ぢををはをしてを走はりを行ゆねを。

田村物語卷之三



田村物語卷之三
 不連行とまりまじし五躰叶り行歩もころろ仕廿祢がをと人
 に頼みかりすれと折りこも憑りれを母然らばを兔よ角連行
 是しを明る程もあるがを急いで山に帰えんとを四人ら奇引
 寒く山路ををはして走り行ね。

